女流義太夫の往年の懐かしい公演記録を復刻し伝統芸能を次世代へと引き継ぐ

義太夫協会では昭和26年より女性による素浄瑠璃の演奏会を定期開催している。この女流義太夫演奏会は記録録音されてきたが、平成18年にデジタル録音に切り替わるまではすべてカセットテープによる保存のため経年劣化が進んでいる。日本の伝統芸能におけるに貴重な音源を消失させてはならないと、デジタル化作業に着手した。

カセットテープに保存された昭和期の名演 急がれるデジタル化

義太夫節は330年ほど前に竹本義太夫によって確立された浄瑠璃のひとつ。義太夫協会は江戸時代より続く技芸員の団体で、現在は歌舞伎義太夫、芝居を伴わない素浄瑠璃の女流義太夫、舞踊の地方をつとめる演奏者が所属し、義太夫節の普及・発展のために活動している。

女流義太夫は明治・大正期には娘義太夫と呼ばれ、アイドル並みの人気があった。義太夫協会では、この女流義太夫の定期演奏会を昭和の時代から絶やすことなく続けてきた。昭和26年から平成2年までは女流義太夫の定席であった上野広小路の本牧亭を会場に、それ以降は国立演芸場とお江戸日本橋亭を会場に月例で行われている。この女流義太夫演奏会は昭和54年から公式に記録録音されてきたが、平成18年にデジタル録音によるCD保存に切り替わるまで、すべての公演がアナログ録音によるカセットテープ保存となっている。経年によりテープの劣化が進んでおり、音源の保存は長年の課題となっていた。そこで5年ほど前から音源のデジタル化を開始し、まずは昭和54年以前に非公式に録音されたオープンテープの古い音源を復元した。そして今年度はAJOSCの助成を得て、平成18年までに公式、非公式に記録録音されたカセットテープの音源のデジタル化に着手した。

「昭和40～50年代は、女流義太夫初の人間国宝となった竹本土佐廣をはじめ、戦後に女流の芸を無形文化財にまで引き上げた演奏家たちが活躍した時代です。ところが当時の公演の記録はカセットテープしかなく、旧来のオープンテープよりも薄いため劣化が意外にも速いことが判明し、もはや猶予はありませんでした」と話すのは、義太夫協会事務局で管理部門を担当する柴田良子さん。

音源のデジタル化作業は、邦楽の古い記録音源の復刻を推進しているSEIBI工房に委ねられた。もともと記録が目的で家庭用のラジカセで録音されたものであるため、カセットテープの劣化状態のチェックに始まり、テープをつなぎ直すなどのデリケートな作業や、音質や録音レベルのチェックと修正、ノイズの除去など、当初想定した以上の手間と時間を要したという。結果的に、のべ180本あまりのカセットテープを精査し、演奏の重要性を優先して選別した135本の音源をデジタル化することができた。

復刻音源で昭和の名演を鑑賞する「本牧亭を聴く会」のチラシ

オンデマンドCD『義太夫協会復刻音源シリーズ第6作』

女流義太夫の温故知新 「本牧亭を聴く会」で復刻音源を披露

デジタル化して復元された音源は、その中から特に現代に伝えたい演奏を選び、当時の演奏会場の名をとり「本牧亭を聴く会」として一般公開している。6回目として今年度は、スケールの大きな浄瑠璃で人気の高かった竹本重之助・鶴澤三生（三味線）による昭和43年11月の演奏『艶容女舞衣　酒屋の段』が披露された。女流義太夫研究家の水野悠子さんによる演奏者にまつわる話も交えたこの鑑賞会は、12月5日にお江戸日本橋亭で開催され、女流義太夫ファンや現役の演奏家など72名が来場し、大きな成果となった。「本牧亭を聴く会」を開く意義について、同協会事務局で事業の企画制作を担当している岡村一枝さんは次のように話す。

「本牧亭は寄席ですから舞台の前にお座布団が並ぶという形で、お客様と演者の距離も近かったのです。音源には演奏の途中で掛け声や拍手が起こったりする様子も入っていますので、寄席の熱気が伝わってきて、この時代ならではの女流義太夫の世界を楽しんでいただけます。そしてなにより、当時の演奏は個性豊かで本当に面白いものが多かったのです。今の若い世代の人たちにとってその未知なる芸は勉強になると同時に、とても新鮮な体験になるでしょう。この会が昔を懐かしむだけにとどまらず、義太夫節を未来に引き継ぐ窓口になればと思っています」

「本牧亭を聴く会」で公開された音源は、義太夫協会復刻音源シリーズとしてオンデマンドCDで頒布される。資料としても貴重な音源であるだけに、女流義太夫愛好家をはじめ、大学や研究団体、地芝居に携わる人など、全国から注文がきているという。

歌舞伎や文楽などのように芝居を伴わない義太夫節は難しいと敬遠されることも少なくないが、「その分イマジネーションが広がる世界。一度体験されるとこの語り芸の魅力にはまる方は多いですよ」と岡村さん。ファンの裾野を広げるためにも、復刻した貴重な演奏の記録を今後どう活用していくかが課題となるだろう。

担当者より

協会としての役目を果たすことができました

一般社団法人 義太夫協会
事務局
柴田良子さん

女流義太夫演奏会の音源は日本の伝統芸能においての財産であり、これを残すことは私たち協会の重要な役目であると考えています。実際、音源は予想以上に傷んでおりとても事務局レベルで対応できるものではなく、AJOSCの助成がなければ果たすことはできませんでした。蘇った音源は、素浄瑠璃の面白さを多くの方に知っていただくために役立てていきたいと思います。